

ホームページ “水生昆虫写真鑑” URL:<http://www18.ocn.ne.jp/~suissei/>

森本 静子

(ひとはく地域研究員、NPOシニア自然大学研究部水生生物科)

はじめに

“水生昆虫が面白い”と思ったのは、エルモンヒラタカゲロウと目が合った瞬間だった。



“水生昆虫写真鑑”の表紙

“人と自然の博物館”の水生昆虫のセミナーに参加して初めて実体顕微鏡を覗いたときのことだ。私が水生昆虫に興味を持ったきっかけを問われるといつもこの話をしている。そのくらい顕微鏡の下から見上げているエルモンヒラタカゲロウの目は衝撃的だった。私の人生を変えてしまったといっても決して過言ではない。水生昆虫を見たくて川やため池の調査にかかわるようになったが、同定という難解な作業が目の前に立ちほだかった。検索図鑑は専門用語が多く読みこなすのは大変難しく、素人

の私にとって同定は四苦八苦の苦勞であり、それだけに同定できた時は大きな喜びである。またごま粒ほどの虫でもそれぞれ美しく精巧な姿かたちをしていて、幼虫から成虫に変態する自然の驚異に触れて感動した。その苦勞と感動を一枚、一枚と写真に撮りためたものをホームページ“水生昆虫写真鑑”として開設した。

ホームページに掲載した流水性の水生昆虫は主に“NPO法人シニア自然大学研究部・水生生物科”の活動で調べたものである。止水性のものは主に“生駒の自然を愛する会”の高山地区のため池調査で調べたものである。今回、別途、“高山地区のため池群の生物相”を口頭発表するがその調査記録の裏付けとなるものである。

掲載の水生昆虫の種数

平成19年1月17日現在、カゲロウ目18種、トンボ目20種、カワゲラ目3種、トビケラ目11種、コウチュウ目41種、ヘビトンボ目2種、カメムシ目35種、チョウ目1種、ハエ目4種、その他の水生生物は23種である。平成17年12月から約1年間でホームページへのアクセス数は7635である。

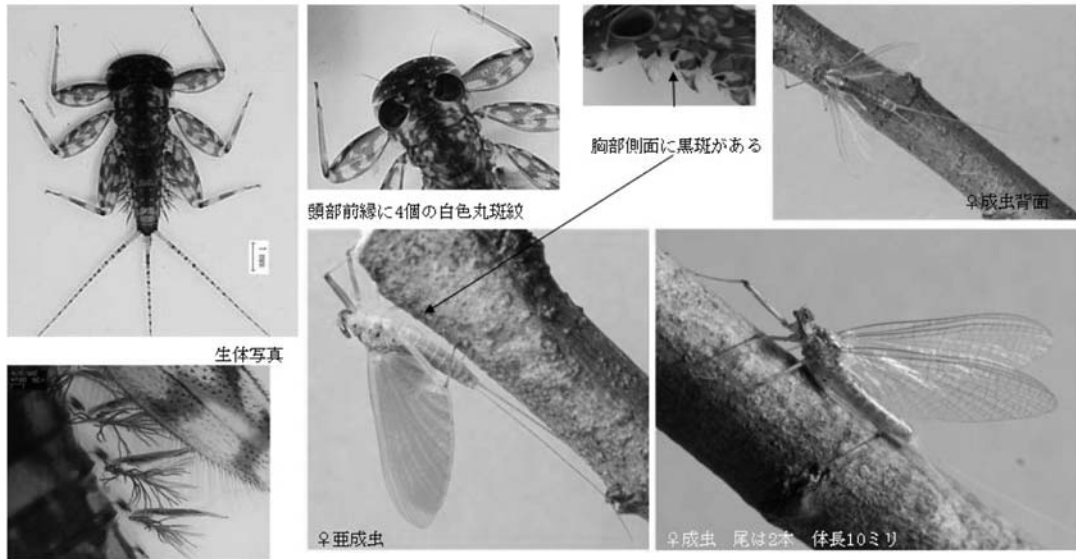
* ホームページ制作時の工夫

- ・表紙、2段目(各目の表紙は)HTMLとスタイルシートを使って作成。
- ・水生昆虫写真のページはWordを使って作成。

Wordを使って作成することで、画像を簡単に自由な位置に貼り付けることができ、編集も楽である。

シロタニガワカゲロウ

カゲロウ目ヒラタカゲロウ科 体長12ミリ



シロタニガワカゲロウのページ

* ホームページ“水生昆虫写真鑑”の特徴

一般の図鑑の写真や絵は小さくて細かい部分が分かりにくいですが、“水生昆虫写真鑑”はデジタルの顕微鏡写真が中心なので小さな虫でも生体を拡大でき細かい部分まで鮮明に見える。

使用したカメラ：Canon Eos Kiss Digital N & 接写レンズEFS60mm

使用した顕微鏡：オムロン デジタルファインスコープVCR800

* 工夫している点

1. 同定の根拠となる部分を撮る。

検索図鑑は、写真や図が少なく、また専門用語がどの部分のことを指しているか理解が困難であった。間違いなく同定できるように同定の根拠となる部分の写真を撮った。

写真を撮ることで同定もしやすくなり、もし間違っても指摘されることにより間違いを直せる。調査記録とあわせて公開する事で調査の信頼性が増す。

2. できるだけ生体で撮る。

水生昆虫は液浸標本にすることが多い。標本を写真にしたものは色が変わることもあり、実物と違ったものになることがあるのでできる限り生体で写真に撮る。

3. 小さいものを拡大して鮮明に撮る。

水生昆虫は小さいものが多く、実体顕微鏡を用いても倍率が低く見えにくいことがある。高倍率のデジタルの顕微鏡を使うことで動き回る水生昆虫の写真を簡単に撮ることができる。

4. できる限り、幼虫、成虫の両方を撮る。

終齢の幼虫を採集して羽化させることで間違いなく幼虫と成虫の組み合わせで写真に撮ることができる。

5. できる限り、雄、雌を撮る。

6. できる限り、自分で撮る。

影が映りこまないようにライトのあて方や光を拡散させる工夫をしている。

最後に

新しい水生昆虫のページが増えていくのが最高の楽しみであり、人生の目標である。

“ひととはく”セミナーで水生昆虫の面白さを教えてくださった三橋先生にお礼を申し上げます。